

不確実なマクロ経済環境における銀行の貸出行動

中央大学大学院 北村 仁代

本稿では、Baum et al.(2005)の研究を基に、マクロ経済の不確実性が、邦銀の貸出行動にどのような影響を及ぼすのかについて分析した。Baum et al.(2005)のモデルでは、銀行の経営者は、不完全な情報に基づいて将来の経済環境を予測しながら、自行の資産ポートフォリオを常に最適な状態、すなわち、リスクと期待収益が自行の効用を最大にするように保っている。このような枠組みを利用することで、最適なポートフォリオ選択の際に、マクロ経済の不確実性の影響を考慮することができる。そして、この最適化問題を解いた結果、マクロの不確実性が増大すると、銀行の貸出行動はより類似したものになるという関係を得ることが出来る。すなわち、マクロ経済の不確実性が増大すると、銀行の経営者が得る、将来の貸出からの期待収益を予測するために必要な情報にノイズが混じる。このノイズは、各期の銀行の総資産に占める貸出比率の分散に対して、負の影響をもつ。各行の貸出比率の分散が小さくなるということは、各期に貸出にまわす資産の配分のバリエーションが少ないことを意味する。その結果、各銀行は、同じような貸出行動をとることになるのである。このように、各行の貸出行動が歪められると、経済全体として最適な貸出が行われれないという結果をまねく。

この関係を実証的に検証するための方法は次の通りである。マクロ経済の不確実性の代理変数は、消費者物価指数を用いて、GARCHモデルで作成した自己相関条件付不均一分散とする。銀行間の貸出行動の類似性は、総資産に占める貸出比率の横断的分散を指標とした。1975年から2007年までのデータを用いて、貸出比率の横断的分散をGARCHモデルで作成した不確実性の代理変数の分散に回帰した結果、わが国においても、これらの期間において、マクロ経済の不確実性が銀行の貸出行動に負の影響を及ぼすことを確認することができた。これは、既存の研究で実証されているような、邦銀の貸し渋りや、横並び行動の存在を、異なる側面から説明する結果であるとも言える。

こうした結果は、金融政策の観点からも、マクロ経済の変動を出来る限り抑えていくことが、銀行を通じた資金の供給を最適なものにするために不可欠であることを示唆する結果となった。